

知床五湖地上遊歩道の再整備について

釧路自然環境事務所

知床五湖は静寂な雰囲気の中で質の高い自然体験ができる場であり、知床国立公園の中心的な拠点の一つとして年間 40 万人以上が訪れる場所である。地上遊歩道は平成元年より北海道により事業執行され、平成 22 年度に策定された知床五湖利用調整地区利用適正化計画に基づき、人間と自然との共存を目指した管理が行われている。一方で現在、当該歩道においては一部木道の老朽化等により、利用者の安全対策及び質の高い利用環境の保全が課題となっている。

現在、環境省における地上遊歩道の再整備基本計画の策定に向けた検討を進めている。

1. 再整備基本計画の策定

基本計画の策定にあたっては、地上遊歩道の現況調査、関係者へのヒアリング、本協議会での議論等を踏まえて検討を進める。

なお、その際には各種計画等で示されている再整備の方針に則りながら、現在の利用のあり方を前提として検討を進め今年度中に基本計画を策定する。

ヒアリングで出された主な意見

■ 歩道について(木道・木橋・階段含む)

<現況の施設について>

- 歩道の幅が狭い
- 展望デッキが小さい
- 展望デッキの規模は現状程度でよい
- 施設の劣化対策が進んでいない
- 滑りやすい
- 交差区間がある

<発生している問題>

- 歩道や展望地での混雑、安全の確保が難しくなっている
- むかるみ・段差など歩道の歩きにくさに伴い歩道を外れる利用者がいる
- 植生の荒廃につながる恐れ
- 排水が困難

<再整備に向けて>

- 資材に石やコンクリート等劣化しにくい素材を使用
- 水たまりには現地で発生する倒木や石などを使った飛び石等に対応
- 階段を外れないよう手すりを設置
- 展望デッキの配置は各湖に 1 箇所程度で十分（現在地を把握しやすい）

平成 28 年 12 月 22 日 知床五湖のあり方協議会（第 35 回）

- 快適な利用と施設の長寿命化を図る対策を講じることで環境・景観面での向上につながる
- 交差区間解消のためのルート付け替え、ただしヒグマの追い出しへの考慮が必要
- ヒグマ出没時の利用者誘導を円滑に行うための施設（ゲートのようなもの）
- 整備の方針としては現行の水準でいい
- 整備水準に改善を求める
- 利用調整地区としての利用形態やヒグマの安全対策を踏まえた整備の方向性が必要
- ソフト面の改良（利用者への情報提供、巡回・メンテナンスのしくみ等）と併せて実施することで最低限の施設整備、安全確保、利用者の満足度向上が実現可能

■ ベンチについて

<現況の施設について>

- 使われていない
- 撤去が妥当

<再整備に向けて>

- 現在のベンチは撤去が望ましいが、ベンチ自体はあった方がよい
- 必要であれば、倒木や岩などを活用

■ 標識類について

<現況の施設について>

- 設置位置や向きが不適切
- 古いため不要

<発生している問題>

- 写真撮影の邪魔になっている
- 滞留時間に影響がでている

<再整備に向けて>

- ガイドが同伴しない利用者のためには標識はあった方がよい
- 数は少ないほうがよい
- 時期、利用期による表示面の掛け替え
- 継続的な管理が必要（維持管理、盤面の情報更新）
- 滞留スペースと一体となった整備
- 現在地を示す、山の名前など湖以外の情報を含める
- 多言語化
- 知床国立公園全体でのサインシステムの必要性

■ 興味対象・魅力となる資源（眺望・撮影ポイント等）

- 知床連山や逆さ羅臼岳
- 湖面を間近で観察（トンボや水生昆虫等）
- 修景伐採の必要性

■ **利用状況について**

- 混雑がよく起きる場所と滞留時間が短い場所の両方がある
- 階段で段差を避け、脇を歩行する利用者がみられる
- トイレがあると安心
- 大ループ・小ループの交差を解消すべき

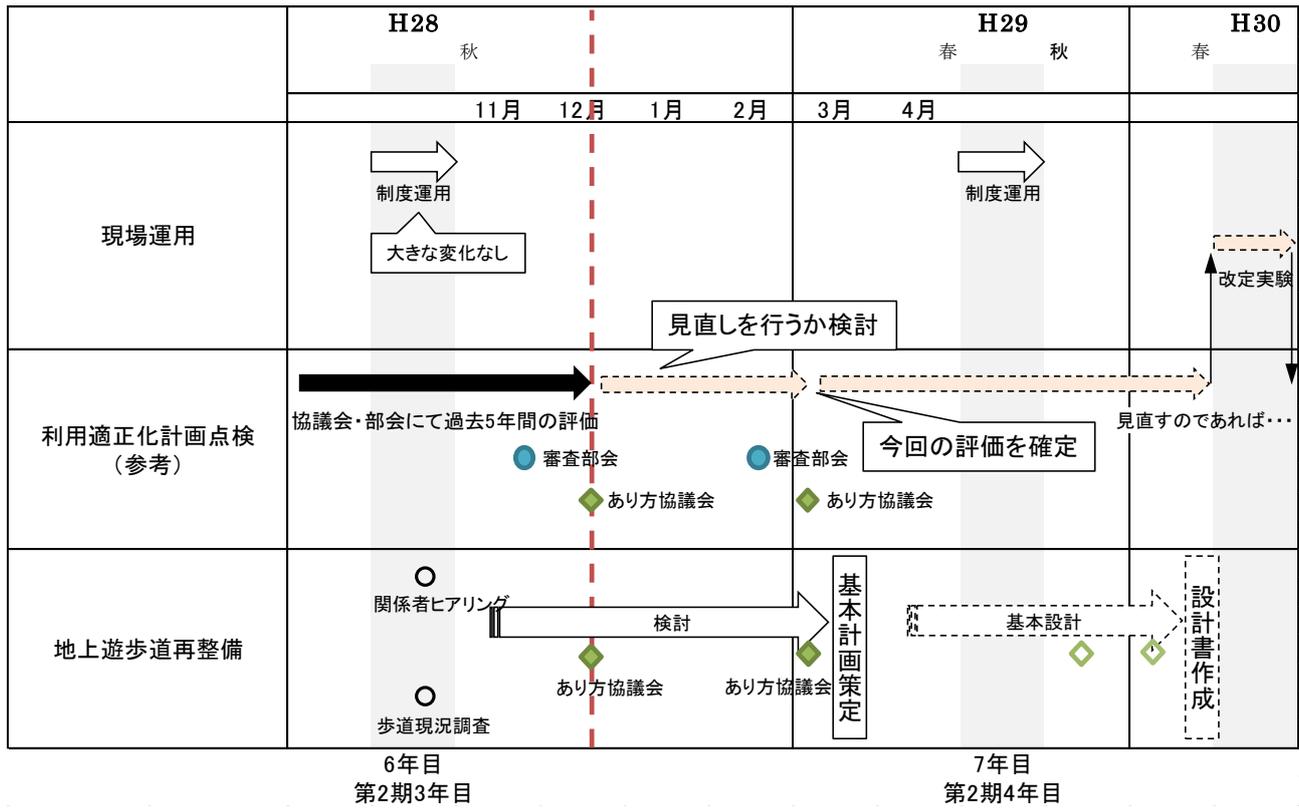
■ **情報提供について**

- 標識を少なくし、配布物を充実する（ルートマップの作成・配布・使い方紹介、情報更新・多言語化の容易さ）
- 現地でのスマホやタブレットを活用した情報提供
- 知床五湖フィールドハウスを情報提供の拠点とするしくみの充実、地上歩道の様子・レベルを伝える工夫

■ **維持管理・修繕等への関わりについて**

- 管理者が複数いることで、管理が重複するときと全く管理が行き届かないときがある
- 管理は現地の組織や人員に依存している状態
- 施設設置箇所等のデータ化がされていない
- 日常的な作業の積み重ねが重要で、歩道の状況の記録とメンテナンスへの反映が必要

2. 今後の検討スケジュール（予定）



参考 1. 各種計画等における再整備の方針

○知床世界自然遺産地域管理計画(抜粋)

5. 管理の方策

(4) 自然の適正な利用

エ. 主要利用形態毎の対応方針

(ア) 観光周遊

(略)

知床五湖地区は、遺産地域の中でも特に利用が集中する地域であることから、過剰な利用に伴う問題、あるいは高密度に生息するヒグマとのあつれきを生じさせないように、効果的な利用の制限、誘導や普及啓発、施設整備のあり方、ヒグマの保護管理のあり方を検討し、必要な対策を実施することにより、適正な利用を確保する。

○知床国立公園 公園管理計画書(抜粋)

5. 公園事業及び行為許可等の取扱いに関する事項

(2) 公園事業取扱方針

知床五湖周回線:知床五湖利用調整地区制度により立入りの管理が図られている施設であるため、施設の管理や再整備等については、知床五湖の利用のあり方協議会の中で検討していくこととする。

○知床五湖利用調整地区 利用適正化計画(抜粋)

2 利用の適正化を図るための基本方針

(4) 利用施設の整備及び管理に関する基本方針

知床五湖地区は、安全で安定的な利用が可能な高架木道と、利用の調整を行いつつ、原生的な自然環境の中で質の高い自然体験ができる地上歩道という 2 つの異なる利用空間を有する地区です。それぞれの利用空間の性格の違いと動線を明確にし、利用者にとって分かりやすい施設の整備と管理運営を行います。

地上歩道は、利用の調整の実施を前提として、原則として歩きやすくするための新たな施設整備は行いません。高架木道については、誰でも安全で安定的に利用できる空間としての整備を行います。駐車場や各施設については、国立公園の核心地域に相応しい施設としての整備や管理運営を進めます。

8 利用施設の整備及び管理に関する事項

(1) 各施設の整備及び管理に関する事項

利用施設の整備及び管理に関する基本方針に従い、適切な施設整備と管理を行います。

① 地上歩道

地上歩道では、より深い自然体験を提供することから、危険木の管理や必要な標識類等の再整備を中心とし、利便性の向上等を目的とした新たな歩道施設の整備は行わないこととします。

参考2. ヒアリング意見

ヒアリング対象者

対象者	日時	場所
笠井 文考 氏（知床アルパ(株)）	9月12日（月） 15:00～16:00	きよさと情報交流施設きよーる
古坂 博彰 氏（(一財)自然公園財団知床支部 所長） 向山 純平 氏（(一財)自然公園財団知床支部）	9月13日（火） 10:00～11:00	知床世界遺産センター会議室
寺山 元 氏（(公財)知床財団 事務局次長） 秋葉 圭太 氏（(公財)知床財団 公園事業係長）	9月13日（火） 13:00～16:30	知床五湖地上歩道（現地 [※] ）
松田 光輝 氏（(株)知床ネイチャーオフィス 代表取締役社長） 岩山 直 氏（NPO 法人知床ナチュラリスト協会 代表理事）	9月13日（火） 18:00～19:30	知床世界遺産センター会議室

※知床五湖地上歩道での現地ヒアリングには、下記関係者も同行
 環境省釧路自然環境事務所／神馬整備計画専門官・長谷川氏
 環境省ウトロ自然保護官事務所／前田自然保護官
 北海道オホーツク総合振興局保健環境部環境生活課知床分室／石井主幹
 (一財)自然公園財団知床支部／向山氏

ヒアリング内容

地上歩道の現況・課題	地上歩道の再整備
<ul style="list-style-type: none"> ● 施設（木道・木橋・階段・標識類等）の設置位置 <ul style="list-style-type: none"> ● 看板やベンチ、展望地の利用状況 ● 歩道の荒廃や施設（木道・木橋・階段・標識類等）の破損、植生への影響がみられる箇所・状況 <ul style="list-style-type: none"> ● 地上歩道にふさわしい利用方法・施設整備水準と照らしあわせて、利用上の安全確保が不十分、魅力を阻害していると思われる箇所・状況 ● むかるみ・水たまりがでやすい箇所（歩道が拡幅しやすい箇所） ● 周囲の植生への影響が見られる箇所 ● 歩道から外れて歩いている箇所 ● 倒木が懸念される箇所 ● 歩道の荒廃や木道などの施設の破損が顕著になり始めた時期・進行状況 ● 水位上昇の影響を受けやすい箇所（主に湖畔の展望地） <ul style="list-style-type: none"> ● 水位上昇時の状況（木道の床板まで浸かってしまうような状態になるなど） ● 眺望のポイント（撮影ポイントなど） ● 立ち入り防止のための柵・ロープ等を設置している箇所、設置・取り外しの時期、課題 ● 冬季の積雪の状況（積雪深） ● 春季の残雪の状況、開園前の除雪作業 ● 歩道の維持管理・修繕等への関わり、課題 ● その他 <ul style="list-style-type: none"> ● 上記以外で利用上、安全上問題があると考えるところ ● 荒廃箇所以外で歩道利用上混雑が見られるところ 	<ul style="list-style-type: none"> ● 目標とする歩道のあり方（植生保護の視点・危機管理の視点・魅力を阻害する要因を取り除く視点） <ul style="list-style-type: none"> ● 理想的なルート：ルートの付け替えが必要と思われる箇所・区間 ● 木道を設置すべきと思われる箇所・区間と設置方法（単線／複線） ● 木道を撤去してもいいと思われる箇所・区間 ● 歩道外への立ち入り防止のためにロープ柵などが必要と思われる箇所・区間 ● 眺望のポイントとなる箇所のあり方（滞留スペース（展望デッキ）：現状通り／拡大／縮小） ● 利用者への情報提供のあり方 <ul style="list-style-type: none"> ● 知床五湖地区全体での情報提供のあり方に左右される内容 ● 資源名標識（湖の名称表記）、案内図標識、誘導標識、注意標識・制札、解説標識 など ● 標識類の設置とその他の媒体・手段の活用 ● 歩道の維持管理・修繕の労力・費用を軽減するための工夫 ● 施工にあたって留意すべきこと ● その他

ヒアリング結果

■ 歩道について(木道・木橋・階段含む)

- 道幅が狭い。親子が手をつないで歩ける程度の幅員があったほうがいい。
- 植生保護期なのに保護になっていない。植物が踏まれて傷んでいる。コンクリート等も用いて歩道をきっちり整備すれば、歩道からはみ出して歩くこともなくなり、柵やロープの設置箇所を減らすことができ、また景観も良くなるのではないか。
- 小ループはバリアフリーにしてもよいのではないか。
- 地上歩道再整備後の整備イメージとして、羅臼湖歩道の整備レベルが思い浮かぶ。
- 全線木道にすればいいというわけではないが、歩道からはみ出して歩くと利用者自身にとってデメリット（汚れる等）になると思わせるようにできるといいのではないか。
- 木道の維持が大変であれば、石材等を利用すればいいのではないか。
- 水のたまるところには、飛び石や石組みを用いてはどうか。
- 階段の側方（段差のない斜面部分）を歩くことがないよう、階段の両側に手すりなどを設置したほうがいいのではないか。
- 展望デッキの面積が狭い。7～8 人が滞留でき、人の入れ替わりができる程度の広さが確保されるといい。
- 四湖の眺望ポイントは、位置を変えたほうがいいのではないか（F～G 間の四湖を奥まで見通せる地点）。

■ ベンチについて

- ベンチは利用されている様子はないため、可能なら撤去してはどうか。

■ 標識類について

- 環境庁時代の標識類（案内図・解説標識等）は高架木道整備以前のものでとても古い。手入れできないなら、むしろない方がいい。再整備する場合は、英語表記くらいはあってもいい。
- 現況の標識類の設置位置は適切とは言えない（例：五湖と四湖間の誘導標識等）。
- ガイドが同伴しない利用者には解説標識があってもいいかもしれない。フィールドハウスの標識は時期によって表示面のかけ替えが行われており、地上歩道内の解説標識にもそのような考え方を当てはめてもいいかもしれない。
- 個人的には、写真を撮るときに湖の名前を表示した標識が入らないほうがいい景色だと感じている。

■ 利用状況について

- P 地点（二湖眺望ポイント）は激しく混雑することがある。

■ 情報提供について

- タブレットを用いた解説のしくみは、ガイド同伴の利用者には必要ないが、同伴ではない利用者に対してはあると面白いかもしれない。知床五湖は利用される場所として、Wi-Fi 環境を整備し、タブレットやスマホで使用できるステーションとする考え方もある。

■ 維持管理・修繕等への関わりについて

- シーズン初めの雪かきは 25～30 人（内ガイドが 12～15 人）くらいで行っており、可能な限り参加している。

平成 28 年 12 月 22 日 知床五湖のあり方協議会（第 35 回）

- 歩道上に危険と思われる要素（近くにハチが巣を作っている等）を発見した場合には管理者に報告をしている。

■ 歩道について(木道・木橋・階段含む)

- 5～6 年前に補修が行われ、何箇所か改修されている。
- むかるみやすい箇所に設置している敷板などは、廃止区間に設置されていた木道等の部材が転用されている。
- 展望デッキのスペースはやや狭い印象。
- 歩道全線にわたって、木道や展望デッキの土台が腐食している。補修等において釘での固定ができない。
- 階段はハードル状になっている箇所が多い。
- 歩道の排水（水抜き）が以前より難しくなってきた。水の抜き方の工夫、もしくは水たまりより高い位置に床板を設ける等の検討が必要。
- 現況の施設整備水準のまま今ある施設を新しく取り替える再整備でいいのではないか。

■ ベンチについて

- ベンチは苔むして利用できる状態ではなく、利用されている様子もない。撤去してもいいのではないか。

■ 標識類について

- 標識類は全般的に老朽化している。
- 各湖に設置されている記名標識には、湖の名称だけでなく、その場から眺望できる山の名称を加えてはどうか。
- 標識類の更新にあたっては多言語対応が必要。

■ 利用状況について

- 各展望地（展望デッキ）、Q～P 間で混雑がみられる。
- Q～P 間で生じる利用者の交差を解消する方策を検討できないか。

■ 維持管理・修繕等への関わりについて

- ロープの設置・倒木等の処理は北海道が実施しているため、施設の簡易な修繕、美化清掃を担当している。以前は倒木処理も担当していた。

■ 地上歩道のあり方について

- ヒグマの高密度な生息地であり、現在の知床五湖の新制度もヒグマの安全対策にフォーカスしたものであることから、ヒグマの行動、季節移動、出没状況等を踏まえた遊歩道の設計が必要。
- 2011 年から開始された利用調整地区制度を踏まえた、構想・歩道計画が必要。自由利用を前提としておらず、事前の情報提供やガイド引率といった制度の考えに即した整備の実施が求められる。
- 「知床五湖フィールドハウスを情報提供拠点に遊歩道に立入るすべての利用者へ情報提供」、「定期的に遊歩道を巡回し、それをメンテナンスに反映させる仕組みを構築」といったソフト面の改良も併せて実施することで、最低限の施設整備、ヒグマをはじめとする安全面の確保、利用者の満足度向上が実現可能と考える。
 - 巡回により把握した遊歩道の状況を知床五湖フィールドハウスにフィードバックし、ぬかるみ・水たまり等の状況を発信
 - 散策時に現在地が分かるよう以下を実現することで標識類は最低限できる。究極として誘導標識は不要、解説標識はポイント名のみ。
 - （ハード面）ジャンクションの明瞭化、交差区間の廃止、展望ポイント数・位置の最適化。
 - （ソフト面）ルートマップを作成・配布、マップの使い方を紹介（情報はすべてマップ内に反映させることで多言語化、情報の更新も容易）。
 - 巡回による散策ルールの指導
 - メンテナンス（主にぬかるみ対策）は倒木を輪切りにした踏み場所の設置。輪切りにしたものは、ぬかるみが発生する遊歩道脇に置いておき、巡回時に設置可否を判断する。

■ 歩道について(木道・木橋・階段含む)

- 木道の起終点（端部）にぬかるみ・水たまりが生じやすい。
- メンテナンス（主にぬかるみ対策）は倒木を輪切りにした踏み場所の設置。輪切りにしたものは、ぬかるみが発生する遊歩道脇に置いておき、巡回時に設置可否を判断する。
- ぬかるみ対策として C-D 間辺りに倒木を輪切りにして踏み場所を設置した箇所がある。そのように現地にあるもの（倒木や石など）を活用するのがいいのではないか。
- 展望デッキ 1 箇所あたりの規模の拡大は不要。デッキの配置は各湖に 1 箇所程度で十分で、その方が利用者にとっても現在地を把握しやすい。
- 四湖の展望地は、G 地点近くの四湖を奥まで見通せる箇所に変更する、三湖の展望地は、歩道沿いで同様の景観・眺望が連続することから、I・J 地点を集約して 1 箇所とする考え方もあるのではないか。
- E 地点及び Q-P 間の交差区間を廃止できないか。Q-P 間については、P-R 間を新設、O-P 間から R を新設。⇒Q-R 間を廃止、O-P 間の半分を廃止するなど。ただし、Q-P 間の交差区間を解消するルート付け替えの検討にあたっては、現地の状況（地形の起伏等）をより詳細に把握する必要がある。

平成 28 年 12 月 22 日 知床五湖のあり方協議会（第 35 回）

- ヒグマ出没時の利用者誘導を円滑に行うための施設があるといい（立ち入りを制限するためのゲートのようなもの）。

■ ベンチについて

- 景観を損ねるため今のベンチは撤去したほうがいい。ベンチが必要ということなら、倒木や岩を上手く活用したいところ。

■ 標識類について

- 地上歩道や知床五湖地区だけではなく、知床国立公園全体でのサインシステムを考えていく必要があると考えている。

■ 情報提供について

- 地上歩道の立ち入りには必ず知床五湖フィールドハウスを通過する。全ての利用者にはしっかりと情報提供ができるしくみを構築すれば（現在ではまだ不十分）、地上歩道の標識類は最低限の整備で十分と考える。
- ルートマップを作成・配布、マップの使い方を紹介（情報はすべてマップ内に反映させることで多言語化、情報の更新も容易）。
- 整備された知床五湖フィールドハウスの様子から、地上歩道の施設整備水準に対する利用者の誤解が生じているように思う。地上歩道の様子・レベルを伝える工夫が必要。

■ 維持管理・修繕等への関わりについて

- 管理においては、コース上に 20 箇所程度の地点名（主に興味地点・展望地点・歩道上のランドマークから構成）を定め、管理者間で共有している。
- 柵・ロープは 2011 年に整理の上、設置。閉園前（11 月下旬）に撤去、一部は放置。開園前（4 月下旬）に併せて整備している。詳細な設置箇所等はデータ化しておらず、設置場所・手法等は度々変更されている。歩道管理者の北海道が定期的にメンテナンスに入っており、最新の情報はこちらでも把握できていない。展望がよい場所や特徴的な樹木（ヒグマの爪痕、クマガラの食痕等）等の対象物がある場所に設置され、いずれの箇所も侵入禁止を目的としている。
- 他の事例と同様に、知床五湖（園地）は、管理者が複数にわたっている。各々の権限・責任・予算には差があり、時に重複し、時には真空状態となる。日常的な現状把握、管理行為は現地の組織や人員が担っているのが現状だが、管理者から明確な委託や契約がない場合も多々あり。
- 歩道は、常に一定の管理コストが必要な施設と認識すべき。維持管理は大掛かりな土木工事だけではなく、日常的な軽微な作業の積み重ねが重要。また、きめ細やかな管理とともに、歩道の状況をモニタリングし、記録することが必要。
- 定期的に歩道を巡回・メンテナンスをする仕組みの構築が必要。メンテナンスは現地にあるものを活用した最低限のものとする。
- 現地のボランティアや人員に支えられているのが現状。これらを活用した維持管理の仕組みは今後も必要。これらを稼働させるためには人員・資材・技術・時間が必要。ただし、特定の組織や人員が過渡に負担にならないための配慮が必要。また、こうした仕組みが管理者として当然担うべき管理責任や管理費用を肩代わりさせるような結果になってはならない。
- 除雪作業については、実施主体が分散。残雪は年変動が大きく、作業量も大きく異なる。

■ 地上歩道のあり方について

- これまで、地上歩道の整備に関する具体的な話し合いは行われていない。
- 地上歩道における利用の位置づけをしっかりと話し合わなければ、施設整備の方向性は見出だせないと考えている。

■ 歩道について(木道・木橋・階段含む)

- 補修のレベルでなく、改善のレベルで再整備してほしい。統一感は特に気にしない。
- ヒグマ活動期以外のぬかるみが生じている状況で、普通の靴を履いた利用者に合わせて地上歩道が閉鎖されたことがあり、長靴を準備しているにも関わらず利用できないことがあった。ぬかるみが生じて利用者の装備に関わらず歩道を利用できるよう施設を整備すべき。
- 整備＝自然破壊というイメージがあるかもしれないが、知床五湖は自然環境について知ってもらう場として、その整備はしっかりするべき。人の踏み荒らしよりも、シカの食害の方が影響範囲も広く、植生破壊につながっているように思う（草木が減り、キノコが良く見られるようになった。）。日本でも有数の環境教育が行える場所であり、整備を進めてほしい。
- 水たまりにより木道は腐朽している。整備する際には劣化しにくい素材のもので整備するべきである。木道でなくグレーチングなどの導入も考えられるのではないかな。
- 歩道の幅が狭い。10人以上を案内する場合もあり、せめて一般の利用者がすれ違いできる幅にしてほしい。年配の人を補助しながら歩けるスペースや子供の手を引いて歩く幅がなければ安全が確保できない。ヒグマが出没した際の避難のことも懸念される。
- 階段は歩きやすさを重視して整備を進めてほしい。木か岩かで統一するという考えよりも滑りづらい工夫が必要。
- 本当は土の道が足にやさしく理想的だが、構造物の導入度合いは“決め”だと思う。
- 水たまりへの対応は、今までの木道のような形だけではなく、飛び石状の踏み台も有効ではないかな。
- 以前より湖の水際線が後退している印象。水際線の後退を考慮した展望地の整備が必要ではないかな。
- 立ち入り防止のためのロープで仕切っても利用者が多くて歩道からはみ出してしまう箇所があるため、立ち止まって見る／見せる場所とそうでない場所を明確にするべき。
- 見通しの良いルートでなければ急にヒグマと遭遇する可能性があることから、歩道のルート変更を考える場合は、ヒグマの追い出しのしやすさも考えなくてはならない。

■ ベンチについて

- ベンチ自体はあったほうがいいと思うが今のベンチは撤去してほしい。新しくベンチを作るなら三湖より先に2～3箇所あるとよい。

■ 標識類について

- 現在の標識類は古く、必要ない。新規で設置するのであれば、継続的に管理されること（補修、情報の随時更新等）が重要。
- 標識類の設置は滞留スペースとセットで考えるべき。
- 解説標識など人工物は少ない方がいい。その配布布物を充実させたほうがいいと思う。
- 英語表記を充実させてほしい。対応言語が少なくても、英語表記がわかりやすいほうがいい。

平成 28 年 12 月 22 日 知床五湖のあり方協議会（第 35 回）

- 標識類の向きが逆光の位置だと写真を撮り直す利用者が多く、滞留時間が長くなる。
- 「〇〇湖まで〇〇m」と表示した誘導標識が設置されているが、利用者自身の現在位置を勘違いさせている場合がある。現在位置を確認できる案内図があったほうがいい。ヒグマが目撃された際に、関係者がその位置を特定しやすくなるとも考えられる。
- 湖の名前がかかれた記名標識は、証拠写真として撮影できればよいのではないか。

■ 興味対象・魅力となる資源(眺望・撮影ポイント等)

- 五湖を最も広く見渡せる位置からは、延長線上に知床連山も見え景色が綺麗である。
- 五湖の湖岸ではトンボや水生昆虫の写真を撮影できる。
- F～G 間に四湖を奥まで見通せる展望地があったが、樹木が成長して眺望がきかなくなっている。眺望を確保し、元の展望地を復活させてはどうか。
- 三湖の景観について、H 地点を過ぎたあたりで多くの人が写真を撮ってしまうが、I 地点でしっかり三湖を見てほしい気持ちがある。
- 二湖の P、Q 地点近くの水面は鏡のように静かな水面になり、羅臼岳が逆さに映って見える。

■ 利用状況について

- 歩道を歩いて回るときに最初に見える湖（大ループの五湖、小ループの二湖）は新鮮味があるため滞留時間が長くなる傾向があり、展望地に行列ができることがある。後の展望地になるほど新鮮味が薄れ、滞留時間は短くなる傾向がみられる。
- 五湖の眺望ポイントである E 地点は混み合う。すれ違うのが大変。
- 四湖～三湖は人が連なっていることが多い。
- 二湖の眺望ポイントである P 地点は小ループ利用者の最初の展望地であるとともに、大ループとの合流地点でもあるため混雑する。
- I、J 地点と O～P 地点は樹林が少なく直射日光が当たって暑くなるため、利用者の滞留は長時間になりにくい。長時間の滞留場所としての整備内容・水準は必要ないのではないか。
- 三湖の周囲（湖岸）を歩く距離が長いので、途中で三湖を二湖と勘違いする人がいる。
- 70～80 代の方も沢山訪れるが、年配の方は段差を上り下りするのが厳しいため段差を避けて、階段側方の斜面部を通る。
- ルート上にトイレが 1 箇所でもあると気分的に安心できるため理想的である。3 時間以上トイレがない状態は、お客さんによってはプレッシャーになる。

■ 地上歩道以外について(高架木道・知床全体での利用)

- 高架木道の利用における左側通行が浸透していない。渋滞の緩和や、すれ違いを円滑にするため、認知してもらうための周知が必要。競技用車いすの方が猛スピードで通行していて事故になるのでは、と怖い思いをしたことがある。
- 知床全体のゾーニングとして、利用者・観光客にとって歩きやすい知床五湖・フレペの滝を楽しんでもらうための整備が必要。
- 海外客を誘致する前に、受け入れ体制を作るべき。
- 知床全体でガイドなしで行けるスポットが 2 箇所程度あるのが理想的。滞在型を目指すのであれば、そのようなスポット数を増やすことは必要だと思う。

■ヒアリング結果（まとめ）

緑字：魅力要素 青字：問題点・課題 赤字：提案・意見等

